12/10/31

3. 問題点の整理(p.130)

本節では、テスト実行手順の枠組みについて整理する。

(1) 基準(criterion)

基準を定める:受験者がどのような言語能力を持っている/　言語パフォーマンスができることを、試験する側が望んでいるのか明確にする。

<u>テストの目的が明確で無い</u>

- ■ テストの目的・意義が多極化し、センター試験、各大学の間で異なってきている。
- ■ センター試験は「入学を志願するものの高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度の判定をすることを主たる目的とする」
  →センター試験を利用した、特別選抜を実施する大学が増えつつある。
- ■ 大東(2004: 4)
  「私立大学の入試問題に対して、それが到達度判定試験なのか、適正判定試験なのかという明確な性格付けを期待することが制度上・原理上難しい」

<u>何の能力を測定するのか</u>

- ■ 「英語の能力」・「言語運用能力」を測定すべき　対　日本語能力や意欲を知りたい　という意見の対立がある。
- ■ 尾崎(2008: 59)
  入試問題は、受験者が大学入学後に授業についていけるかを知るために行われているかもしれない。「英語力」だけでなく「暗記力」・「日本語力」・「勉強する意欲」をテストしているということも考えられる。
- ■ 水光(2006: 19)
  大学は高校の単なる延長ではなく、入試は学術研究をするのにふさわしい人材やする見込みのある人材を探る選抜である。
- ■ 金谷(2006: 16)
  「音声か文字か、受信か発信かということではなく、現在の問題の難易度や質を改善せよ」、「語彙や文構造が複雑すぎ、内容が高校生の知的水準を超えてしまっているという批判がある」。
- ■ 江利川(2006: 14)
  コミュニケーション重視の傾向が高まり、リスニングの導入によってさらに拍車がかかることを予想した上で、学習指導要領の改訂で英語学力の低下を危惧。
- ■ センター試験は指導要領に従った高等学校教育における到達度を測定するものと規定されているため、それに沿った出題がされなければいけない。しかし、指導要領と学校教育の間の差を念頭に調整をしなければならない。

テストする英語の問題

■ 「使わない、聞かない英文（非 authentic）」と「入試問題はこういうものだ」という固定観念の主張がぶつかり合っている。

■ 小篠(2005：101)
教科書の英語について、「我々の習っている英語は『平明体』と呼ばれるトレーニング用の特殊な文体であり、パーマー(1928)が「この文体ですべての文体の 95%～100%をカバーする」としたものに基づいている。

■ 酒井(1996: 68)
学校の英語の授業で行われていることは、訳語を一対一対応で定められた公式に従って並べていく作業で、実在する英語とはほとんど関係のない、架空の英語＝現実から切り離された「人工言語」である。

問題の難易度

■ 吉村他(2005)
センター試験が易化しているという意見と、センター試験の平均点がこれまで大幅に下がることもなく 6 割前後で推移してきた事実を合わせて考えると、平均点を一定に保つために問題を優しくする必要があったのだろう。

(2) テストの細目表（test specification）を書く

(1)の目的を合理的に実行するための具体的なテストの設計図を書く。

テスト細目表が作成されることが少ない

■ 含むべき情報は、内容、構成、時間配分、使用媒体、テクニック、基準点、採点手順。内容、テクニック以外は文章化されている場合が多いが、それ以外は文章化されている例がない。

(3) テストを実施する

(2)に基づき、すべての受験者にとって公正なテストの作成・実施・採点を行う。

作問者のほとんどが問題作成の基本的な知識・技術を持たない

■ 教員は過年度の問題を参照し、経験的にテスト問題を作っているが、テスト作成、運営の知識・技術を持っている者は数が限られる。

■ 問題形式によって、測定できる能力や作成上の注意事項があり、それらを熟知せずには上質な問題は作れない。

テスト実施回数の増加

■ 私学の場合は多数のテストを短期間に作成しなければならない上に、作問担当者数は少ない。

採点に関する問題

■ 英作文の採点などでは、採点者間で採点の基準が揺れることが多いため、トレーニングや得点調整が必要になる。

(4) 妥当性の検討(validation)を行う

テストが当初の目的を達成するのに相応しいものになっていたかチェックする。

結果の分析が行われているか

■ IRT 分析を行い、テスト項目の性能を精査し、問題とともにデータを蓄積する、などを行なっている大学は多くないと考えられる。

■ 入試回数の増加、対象人数の減少などによってサンプル数が十分取れず、信頼性のある結果を得られない場合がある。

4. 提案の整理

テストの基準に関して

■ Brown & Yamashita (1995)
Standards for Educational and Psychological Testing を使うか、参考にして基準を開発せよ。
→「テストとテストの実施そしてテスト仕様の結果を評価する基準を提供すること」を目標として AERA、APA、NEME が共同して作成した基準。

■ 水光(2006: 21)
「高校の指導要領の範囲を守るべきか、超えて良いか」という問題を提起し、必要に応じて判断すべき。

■ 江利川(2006:15)
「学習指導要領の路線と対立してでも、信念をもって、求める学生像に則した出題をする」、「英語力とともに思考力と教養を問う」べき。

■ 柳瀬(2006: 24)
入試英語問題の見識を明示することが必要。

■ 大学英語教育学会(1971: ii)
語彙について、「現在の高校のテキストおよび各種語彙表を参照し、高校の英語教育に過度な負担がかからぬよう配慮する」
難易度について「基礎的な英語学力を問う問題とする」

■ 靜(2002: 262)
社会的影響の大きい熟達度テストで測定すべき英語力の側面は①英語から意味を取り出す能力、と②意味を英語として生成する能力　の２つのみであるべき。

■ Brown & Yamashita (1995)
communicative な教育を行なっているのだから、それを反映したテストであるべき。

■ 金谷(2006: 18)
「入試問題で使われる英文は、日常で出てこないような状況を扱った英文だから意味が無い」という批判は不適当。

英文について

■ 大学英語教育学会(*ibid.*: ii)
英文について「出展は現代英語に限る」という提案をしているが、現在ではほとんど古風な文章は見られない。

回答の提示に関して

■ 大学英語教育学会(1971: ii)
「解答例を公表するよう努力する」

■ 松井(2006: 15)
和文英訳、自由英作文、エッセイライティングなど、まとまった英文を解答として要求する出題に関して、望ましい解答例を大学側が公表することとしている。

■ 大学は対外的に大学が求めるものを明示的には発信しておらず、予備校や出版社が回答と解説を売り物にする状態は不健全である。

テストの形式、テストテクニックについて

■ 江利川(2006: 15)
テスト方式について、「会話力の試験は面談方式とする」「聞く力と各力を同時に測れる『書取』(dictation)を復活させる」という提案をしている。

■ 大学英語教育学会(*ibid.*: ii)
テスト方式について「速読テストを取り入れる」「Hearing test の実施に努力する」「Speaking は口頭で直接に発表させる方法で努力する」と謳っている。

■ 小林(1996)
空所補充問題はやめるべき。この方式は内容に関する知識、理解力、英語力、常識、総合力が要求され、受験テクニックだけでは解けない。
→原文のみを正解とするのではなく、別解を併用することで問題がなくなる。

■ 大学英語教育学会(*ibid.*: ii)
採点について、「主観テストについては、採点基準を厳格に規定し、採点が主観的にならないように配慮する」、「主観テストの適正な割合についても配慮する」。

■ 大学英語教育学会(*ibid.*: ii)
英文和訳だけでなく、設問形式を工夫し、内容理解力が測定できるように配慮する、真に英文の基礎的構成能力を測定するための種々の出題形式を工夫する。

■ 靜(2006: 3)
和文英訳の代替案として、「和訳ではなくポイントを英語で書かせよ」、「T-F test をやめてスタンダードな多肢選択問題にするのが良い」としている。

■ 設問と選択肢については、
①常識で判断されてしまわないか、②長さがヒントにならないか、③表現の不自然さがヒントにならないか、④設問の順序を本文と違えて受験生を混乱させない、⑤同一表現を選択肢で繰り返して受験生に時間を浪費させない、⑥不必要な視線移動を強いて受験生を焦らせない。

統計分析について

■ Brown & Yamashita(1995: 98)
テストの信頼性、妥当性、実用性について明らかすべき。テストをレビューする機関があると良いと述べている。

5. 良い問題とはー提言

■ 英語入試問題の問題点は、(1) 入試の実施方法の問題、(2) 日本の英語教育の問題。

■ 良い問題を生み出すための条件を各大学の状況に適切に展開・実施することで良い問題を作り、試験を実施することができる。

日本テスト学会(2007: 1-14)

1.1 テストの基本・設計

開発者は利用目的や場面に合わせて、測定内容、測定形式、実施方法・手続、結果の利用方法、適用を想定する対象者の範囲などを明確に定め、基本設計を行う。

1.2 測定内容の定義と構造化

測定しようとする能力、学力、性格、行動などの特性を明確に定義し、それが表現できるような適切な尺度を構成する。

1.3 質問項目の設計

質問項目の作成には、測定内容に関する十分な知識、その内容を測定するにふさわしい質問形式や表現についての十分な知識と経験が必要。

1.5 採点手続の設計

採点手続を詳細かつ具体的に示すべき。客観式テストでは、採点手続の理論的根拠を明らかにし、主観的測定では、測定基準および評定手順を明確に測定する。

2.9 主観的な評定による採点

主観的な評定によって採点する場合は、採点者のトレーニングをする。また、採点後には複数評定者の評定の整合性などを分析し、必要に応じてさらに調整を加える。

3.5 統計情報の公開

テストの品質を検証し、また改善の方法を見出すために、テスト結果の統計情報が公開され、活用

されるべき。

4.2　テスト実施後の調査と検討

テスト開発者、実施者、利用者は、テストが意図された特性を測定していたか、実施目的、対象者、適用場面に適切であったか、テストの利用がどのような影響を及ぼしたかなど、過去の資料と照合しつつその結果について調査分析し、得られた知見も開示するよう努める。

5.1　良い問題を生み出すための条件

該当校の求める資質・能力を明示せよ

- 英語入学試験は純粋な語学能力試験ではないと考えることもできる。各大学が英語の入試を通じて評価したい資質・能力が英語の運用能力のみではなく、日本語力、意欲、英語に限定しない広範な知識などである場合はその旨を明確に表示すべき。
- 英語の試験は英語の運用能力のみを問うべきであるとの主張もあるが、入学試験の特質からすると事前に出題範囲・内容を明示すれば問題はない。高等学校の科目名を範囲として表示しておきながら、実際には逸脱しているのは不誠実である。

明確な出題範囲を提示せよ

- 私立大学の多くの試験科目と出題範囲の表記は「外国語　英語 I、英語 II、リーディング、ライティング」という形で、特に指導要領に関する記述はない。
- センター試験に関しては、
  1　大学入試センター試験の出題は、高等学校学習指導要領に準拠して行う。
  2　大学入試センター試験の出題強化・科目等は、別紙のとおりとする。
  3　大学入試センター試験は、主として多肢選択による客観式の検査方式により出題し、解答はマーク方式とする。　と明記。
- ただし、過去には実際に少量の(学習指導要領から)逸題した問題が存在していることが報告されている。

テストの問題、正解、解説、統計分析を公表せよ

公的な発表要件を規定せよ

- 個々の大学で明確な発表ができないのであれば、しかるべきところが公表要件を新しく規定しても良いのではないか。

テスト出題者の作問能力を担保せよ

- Native と共同作業をするにしても問題形式の性能や作問上の注意点などの基本を身につけ作問するようにしたい。
- 試験項目の機能や注意点を明確に記述したマニュアルの整備も望まれる。

5.2　英語入学試験問題作成要領　例

1　英語入学試験の目的

・測定する能力とその目安
＜英語力＞
＜日本語力＞
＜推理・想像力などの適正＞

・英語力の具体的な目安
＜Reading＞
＜Writing＞
＜Listening＞
＜Speaking＞

・本テストの性格
・出題範囲
・科目
・指導要領の扱い
・検定教科書
・語彙範囲
・文法事項
・長文問題トピック
・会話問題トピック

2　テスト細目

・問題の指示に用いる言語
・1 セットの試験問題の構成
・各問題項目の内容と注意点
[英文の選択]
[選択肢]
[注釈数]
・作問組織と担当者の構成
・日程
・作問全体にわたる注意点
・会議の構成
・会議の運営

3　実施後の処理

・記述式問題の採点
・統計処理
・各項目の評価
・評価の利用

追加コメント

大学入試のレベルでも様々な議論が行われているが、それらが決して同じ方向を向いて議論されたものではなく、大学入試で測定すべき英語力の構成概念が各大学やテスト作成者の間で統一されていないことは問題であると感じた。「外国語」または「英語」という科目を通じて受験者の「記憶力」、「学習意欲」さらに「日本語力」などを見たいと考えている試験実施者がいること自体が不可解かつ不健全だと思う。それらの技能、意欲を見たいのであれば、小論文や面接、その他の試験を活用すべきであり、「英語」を通じて行うようなものではない。これらの面を考慮した上で、大学入試で測定する英語の構成概念を明確化し、それを共有する必要性があると感じる。